

国木田独歩『酒中日記』論

——今歳の日記を読む記者の視点に着目して——

弥 頭 直 哉

一 独歩の運命観

国木田独歩の『酒中日記』は明治三十五年、雑誌「文藝界」に発表された。この『酒中日記』は後に、翌三十六年に書かれた『運命論者』が巻頭を飾る第三作品集『運命』に取り込まれていることから、これまでも、

独歩が人間の運命を描いた作品には、(中略)「運命論者」「女難」「酒中日記」に代表される、運命に押し流され破壊していく人間を描いた系列がある⁽¹⁾

というような評価がなされてきた作品である。「運命に押し流され破壊していく人間」と一義的に規定できるかどうかは考察の余地が残るものの、『酒中日記』は『運命論者』とともに、当時の独歩が抱いていた運命観を反映した作品と考えることができると思われる。その独歩の運命観については、独歩自らが『運命論者』の意図に触れる中で後年、次のように述べている。

日常の総てを通じて単に事実とのみ解し運命の力を否定し去る能はず。然れども又総てを運命の力なりと断定して、運命の力

以外全然人間の權威を認めずと言ふに非ず、所詮、吾人一生の起伏を通じて事実と運命とは相半ばするなり。(中略) 人間の權威能く運命を作る事を否定せざると同時に、或点以上人力を以て運命に抗すべからず(後略)⁽²⁾

この内容解釈について関肇氏⁽³⁾は、事実と運命を「排他的な関係として捉えるのではなく、むしろ両者を包括するあり方を重視している」とし、そこに「運命の力と人間の權威との相関の主題」を読み取られているが、この指摘を踏まえて考えるならば、ここで言われているのは、人間の主体的な存在の「事実」と、その「事実」を超えた主体の力ではどうにもできない運命的な力との葛藤、相克の問題であると言えよう。『運命論者』主人公高橋信造の言葉を借りれば「天地間に行われる惨刻なる理法」と言うように、天地の間に生存の基盤を置く人間である限り、避けては通れない人力を以てしては如何ともしがたい運命、人間の權威を根こそぎ奪っていくような、予知できない不条理な運命というもの、つまり人間とその存在の運命をめぐる自由と必然の問題がここでは問われているのである。

独歩がこうした運命観をもつに至った背景としては、佐々木信子との破婚以後文学者として歩みを開始した明治三十年代における、窮迫した現実の様々な人生体験があつたと考えられる。当時例えば「然らば過去の我は何なりしぞ。曰く空想の児なりき。」(「我が過去」)⁽⁴⁾と述べ頻りに「驚異」への願いを口にしてきたことから窺えるように、破婚体験を通じて独歩は、自らの思考の不実、観念の矛盾点を鋭く見つめそこから自らの実存に目覚めることを願つたのであつた。実存に驚異し、真の自由を生きる再生の人生を期したのである。しかし周知のように、生涯確たる職を持つことができず、また作家としても恵まれなかつた独歩の生活、人生は、その願いと期待とは裏腹に困難にみちたものであつた。例えば年譜によると、明治三十四年十二月には失業による困窮した生活のために妻子を一旦、妻の実家に託し自らは單身、侯爵西園寺邸に寄宿するような暮らしを余儀なくされることになり、また同年六月には、極貧の生活からの脱出を求めて今後を賭けた政界進出の夢が、その夢を託した盟友星亨が凶刃にたおれることによつて頓

挫するという事態に遭遇することになったりと、独歩の生涯はその精神性と背離して常に安定せず、うらぶれた家庭生活が続いていたと言うことができる。

そして、これら崩壊寸前の閉塞した日常の暮らしの中での人生体験は、自らの未来の自由への願いや希望では語り得ない即ち、自らの意志では処しきれない、生存の「事実」の体験として受け止められたであろうことは容易に推測されてこよう。小泉浩一郎氏はこの独歩の運命観生成の経緯について次のように述べられている。

「驚異」の思想を語った作者独歩における実存的生命感の追求という思想的課題の延長上に（中略）代つてあるのは、人間を支配する「人間以上の者」としての宇宙の「無窮無限という事実」「運命」という謎⁽⁵⁾

氏の指摘するように、文学者として出発した独歩の「実存的生命感の追求」即ち、天地生存の感に目覚めて正しく外部を見ようとするとする眼が、先に見たような不条理な人生経験をすることを通じて、その抗しきれない外部である天地生存の事実とそれに向き合う自己の発見にいたったとき、人間以上の者としての運命という謎が自覚されて来、さらにこうした中で「人間の権威と運命の相克」を言ったように、如何ともしがたい天地生存の事実に対峙するなかでしか人間の人生は確立していかないんだとする運命観が生まれてきたのだと考えられるだろう。そして、こうした天地生存の事実に向き合う体験が、もう一つの独歩の運命観即ち、『運命論者』高橋信造の口を通して語られる、

人の力を以て過去の事実を消すことの出来ない限り、人は到底運命の力より脱る、ことは出来ない

という運命観即ち、人の力を以ては過去は過去として封印されるものではなく、従つて現在生きる人は過去からの連続の上にか生きられないんだとするような運命観を形成していったのだと言える。後に巻頭を飾ることになる作品『運命論者』とともに第三作品集『運命』冒頭に収められるこの『酒中日記』の主人公大河今蔵の、日記を書いて過去からの連続としての現在を見定めようとする姿は、こうした明治三十年代の不条理な人生体験を通じて深く実感さ

れてきた、人間の運命というものに対する作者の共感の目が描かせたものと考えることができるのである。

- 註(1) 山田博光「独歩の自然観・運命観」(「解釈と鑑賞」一九九一年二月号 至文堂) 五三頁
- (2) 国木田独歩「病床録」(明治四十一年七月 新潮社)、「国木田独歩全集」第九卷 九八頁
- (3) 関肇「国木田独歩「運命論者」の世界」(「学習院大学文学部研究年報」第三十九輯 一九九三年三月) 二六二頁～二六三頁
- (4) 「我が過去」は遺稿であり、「独歩小品」(明治四十五年五月、新潮社)に収められている。執筆年代は不明であるが、本文に「今又西京に於て」との視点があり、独歩が離婚直後に京都を訪れた明治二十九年と考えられる。
- (5) 小泉浩一郎「運命論者」(「解釈と鑑賞」一九九一年二月号 至文堂) 一一四頁

二 今蔵の日記執筆意図

『酒中日記』は、大河今蔵の書いた日記とそれを読んで公開した記者の「付記」から構成された作品である。これまで先行研究においては、芦谷信和氏¹⁾の緻密な整理にあるように、主として五年前の東京の大河今蔵の人物像や彼を取り巻く時代状況、社会制度を分析し、今蔵が経験した悲劇が何に由来しているのか即ち、今蔵の性格による悲劇なのか、当時の制度や慣習がもたらした社会悲劇なのか或いは、それら「性格と客観的現実の状況とが運命的にからみ合う悲劇」²⁾なのか等をめぐって論が展開され、あまり作品の構成面については踏み込んだ言及が為されてこなかったことが指摘できる。しかし近年では関肇氏が、

大河の日記の末尾にある「記者」の付記の前半部分が、後日談と日記の入手経路を示すことによって、日記の外延を形作り、物語化する機能を果たしているのに対して、「記者」の所感を記した後半部分は、それらを包括し(中略)大河の日記を相

対化する機能を果たしている。(3)

と一步踏み込んだ指摘をされたように、作品の構成を踏まえた評価、即ち大河今蔵個人の書いた日記と、それを公開する記者の付記との結びつきによるトータルな形での作品理解が、評価のポイントの一つとして求められていると言えるだろう。作者の独歩も、

如何にして余が胸に充実せる思想を遺憾なく發揮せしむべきかと云ふ、其一事に腐心して止まず。故に彼の(中略)「酒中日記」の如く、全然日記体を以てしたるもあり。(4)

と言っているように、充実せる思想を表現するために作品の形式、構成に意図的であったことを述べており、作者の胸に充実せる運命観が先程指摘したように、この《日記》を書く大河今蔵の姿に表されているとする本論においても、関氏の指摘にあるように、その日記を公開する記者の「付記」を含めた構成面に着目して考察を進めていきたいと考えている。従って、五年前の東京での出来事も、先ずは日記のなかで振り返られた今蔵自身の体験談として考えなければならぬであろうし、大河今蔵像もこの日記を書いている人物としての分析が課題となってくると言えるのである。

では何故、今蔵がこの日記を書き始めたのかについてであるが、それは次の日記初日の記述に窺うことができる。

自分のような男の身の上に有ったことや、有ることを、今日からポツポツ書いてみようという気になったのからして、自分は五年前の大河では御座らぬ。(五月三日)

と言っているように、それは自分が変わったことを意識したことが一つのきっかけとなっていたことが考えられる。日記をその固有の問題点から論じた紀田順一郎氏⁽⁵⁾は、日記執筆には「直接の動機がある」として、「たとえば日記に記録するに値する生活上の展開を予感したとか、あるいは一種の意識革命を行おうとしたとかいうことが考えられ

る」と述べているが、この大河今蔵の場合は今少し複雑であったと思われる。予感される生活上の展開や意識革命といった新たなものへの志向ではなく、同じ初日の記述のなかで、自分が変わったことを意識させる核心部分にある「氣象」の変化が強調されているように精神心理の上で新たな一つの段階を向かえていたことが考えられるだろう。

この落ち着いた安定したものになったと言える今蔵の「氣象」の変化は、

ああ今は氣楽である。この島や島人はすっかり自分の氣に入って了った。(中略)自分のような男を、ともかくも呑氣に過ぎしてくれるかと思うと

と言っているように、島の住民との暮らしを通じてもたらされたものであったことが窺える。この今蔵の氣象に変化をもたらした島の住民との関係について出原隆俊氏は、次のように指摘されている。

都会で失敗した人間が零落の経路をたどってこの島に来る。そして、「悲惨の影」があつて「人の憐れみを自然にひくのかも知れない」と自らいう、へ敗残者へのイメージが人々の警戒心を解除する。¹⁶⁾

五月十八日の記述に、「食のために色々の業に従がい、種々の人間、種々の事柄に出会い、(中略)往時を想うて泣き今に当って苦しみ、そして五年の歳月は澱みながらも絶えず流れて遂にこの今の泡の塊のような軽石のような人間を作り上げた」とあるように、すぐる五年の経験をくぐり抜ける間に、東京という生活空間や身分や地位、家といった外的な属性を失って零落し「軽石」ようになった今蔵の心が、これもまた「光榮ある歴史もなければ国家の干城もない」という外的属性を持たないでいるこの島の暮らしと住民の心に、共鳴することによって関係が成り立っていたのだと考えられるのである。即ち、明治三十年代の実存的生命觀の追求から運命凝視へと至る独歩の人生觀変遷を意味する言葉で言えば、まさに運命としての天地生存の感のなかでその交友が結ばれていたと言えるが、従ってこのとき、

今となりては、外に望は何にもない、この島に生まれてこの島に死し、この島の土となりたばかり。(六日)

というように、今蔵にこの島に身を埋めるような覚悟が生まれたとしても不思議ではない。そして、この天地生存の感のなかで覚醒し島に身を埋める覚悟が芽生えた今蔵の心は、例えば「一件がありありと眼の先に浮んで来る」(四日)というような過去を捉える視点に窺えるように、その覚悟の覚醒に照り返されるようにして、これまで流れ流れて苦しんでいる間は見えなかった、五年前の出来事の真相とその後の、現在にいたるまでの自分の足取りの意味を浮び上げさせ、その確認に向かわせたのではなかっただろうか。即ち、現在の目の前の生活の意味が徐々に輪郭を持ちはじめ、その意味を問うことが不可避になっていたのだと思われる。そうであるからこそ今蔵は、「身の上の有ったことや、有ることを書いてみよう」というように、日記を書き、自分の来し方行く末即ち、自分が何故ここにいるのかの必然の糸を手繰り寄せて確認しようとし、過去からの連続としての現在を見定めようとしているのだと考えられるのである。

註(1) 荻谷信和『独歩文学の基調』第六章「酒中日記」三三九〜三四〇頁(平成元年六月 桜楓社)に以下のような指摘がある。「以上の二つの批評文(稿者註：明治三十九年十月『早稲田文学』の批評と同四十一年の『新潮』追悼号の小山内薫評を指す)に見られる「現実そのものの欠陥」と「主人公自からの過失、微弱、無気力」||「自己の病所欠陥」と運命の三要素とそれらのからみ合いが、その後の「酒中日記」のテーマ・思想・作品解釈に関する諸説の展開の主軸となつてゆくのである。」

- (2) 北野昭彦『国木田独歩の文学』第十章「非凡なる凡人」の系譜(二六六頁(昭和五十五年一月 桜楓社))
- (3) 関 肇「交錯する時空間——国木田独歩「酒中日記」論——」(『光華女子大学研究紀要』一五四頁 第三十二号 一九九四年十二月)
- (4) 国木田独歩『病床録』(明治四十一年七月 新潮社刊)、『国木田独歩全集』第九卷 七五頁

- (5) 紀田順一郎「日記の虚実」五二頁～五三頁（昭和六十三年二月 新潮社）
(6) 出原隆俊「ヘュートビア」の諸相」（『日本文学史を読む』近代）所収 平成四年六月 有精堂 五六頁

三 受容せざるを得ない運命の直視

そこで今蔵は、現在へといたるきつかけとなった事件、出来事の発端から書き留めていこうとするが、当時を振り返るとき今蔵は常に酒を飲んでいなければならない。またその出来事、事件の核心部分へもなかなか書きすすめられず、そればかりか例えば二日目の記述「酒が醒めかけて来た！今日はここinde止める。」に明らかであるように、事件のことを思い出そうとすると酒が醒めかけてくるためか、意図的に途中で中断されたりする。

このあと、翌日も飲めや歌えやの大騒ぎで日記は書かれず、翌六日になって、

ああ気楽だ、自由だ。（中略）それでいてお露が無闇に可愛いのは不思議じゃないか。（中略）お露とならば何時でも死ぬる。

というような先にも確認した、身を埋めることへの覚悟を促す島の人々との暮らしや関係に思いを馳せることで、ようやく書き継ぎこうとされていくことになる。

しかし、このことは今蔵にとって、日記執筆の動機となった身を埋める覚悟以上に、「ありありと」見えてきた過去から連続する現在を容認できない視点が先行し、発端となった事件、出来事の核心部分を振り返ることをとどめようとする意識が働いていることを意味していよう。そして、そのときやはり問題となってくるのが、この島での暮らしを覚悟するうちにも、

何れにせよ、自分の性質には思い切つて人に逆らうことの出来る、ピンとしたところはない（五月六日）

というように、いつのまにか心がスライドしてしまふ、自己の気の弱い所を気にしている点なのである。そうする

と、この後すぐに、自分にはピンとしたところはないので、母と妹の「墮落」を止められなかったのは「当然」と言われていることは見逃すことができない。ここでその弱さのために「当然」そうなったとされる、今蔵が母と妹の爲に出来なかつたこと、乃至はさせられたことは、彼にとつては十月二十五日の事件と以後の一連の出来事の發端となつた要因と考えられていることは言うまでもないだろう。それが自分の氣が弱いために当然だと言うのである。つまりそこには、五年前の當時の一連の出来事、事件は、氣の弱い自分のために起こつたんだとする見方があると考えられるだろう。それ故、今蔵は「嗚呼！ 何故あの時自分は酒を呑なかつただろう。」（七日）「何と意気地なき男よ！（中略）どうしてあの時分はあんなに野暮天だつたらう。」（九日）というように、當時の、事件を食い止めることができなかつた氣の弱い自己に対して批判を加えるわけであるが、この今蔵の自己批判については関肇氏の傾聴すべき見解がある。

日記執筆時の大河が行う過去への批判は、あり得べかりしもうひとつの仮構の展開を対置するかたちでなされる（中略）大河における「今」と「彼の時分」の自己意識ははっきりと分化し、深い悔恨の情をもなつて仮構の展開が思い描かれている。

（中略）しかもこの仮構された展開は、酒の勢いを借りたものであり（中略）大河が、過去に対置するかたちで行う自己批判は、拠り所の不安定な自嘲的な性質のものとなる。(1)

今蔵の、過去の氣の弱い自己に対する批判が自嘲的な性質のものとなるのは、五年前の事件、出来事が起きてしまつた取り返しのないものであるからなのを言うまでもないことであるが、では、そのときそこに対置されている仮構の展開の意味が何なのかが考えられなければならないだろう。この仮構の展開は先にも取り上げた「どうしてあの時分はあんなに野暮天だつたらう。」のような箇所では、それは表面的には母への不平、不満に読み取れ確かに、その言い方の調子からすれば、そうした不平、不満が今蔵の心の中には強く残つていたと言えるが、しかしこれが自

らの気の弱さ故、事件を食い止めることができなかつた自嘲的な自己批判とともにあることを考えると、こうした仮構の展開の裏側にあつた真意とは、関氏の言う「深い悔恨」即ち、こうして「文句」を言つてでも止め負すべきだつたとする今蔵の母に対する悔恨の思いであつたと考えられるのである。今蔵には、当時から強く自覚されている肉親を中心にした、自分と深くかかわりあいのある人々との関係を思う「情」があつた。

父のこと母のこと、それからそれへと思を連ね、果は（中略）これまでに知らない深い人情の秘密に触れたような気にもなつた。お政は痛ましく助は可愛く、父上は恋しく、懐かしく、母と妹は悪くもあり、痛ましくもあり、子供の時など思い起しては恋しくもあり（後略）（五月七日）

ここで言われているのは、一人の人間今蔵に結びついて彼を支えていた近親者と肉親の絆、とりわけ複雑な感情を抱きつつも解き放つことのできない母への「情」言い換えると、人間の存在を根底から支える「人情の深い秘密」であると言えよう。こうした人間の根本からの支えを、日記を書く現在も今蔵は強く自覚し、憎い憎みきれないとか、或いはたとえ「悪婆」だと思われたとしても、そうした外的な判断ではどうにも処しきれない、母親というものとの「深い人情」で繋がつた、あり得べき正しき関係を見る眼が今蔵にはあるのだと考えられるのである。

しかし現在、今蔵はそうした根本の支えを、自らの気の弱さ故に外的な世間の教員今蔵という価値判断に堪え切れず、喪つてしまったのである。このとき今蔵に存在の支えを喪つた深い孤独感や、取り返しのつかないことになつて空転する自の暗い人生が実感されることになつても不思議ではないだろう。それが窺えるのがまさに、五年前の事件、出来事の中核部分の一カ月を述べ始めた直後の五月十一日の現在の心境を述べた記述である。

親とか子とか兄弟とか、朋友とか社会とか、人の周囲には人の心を動かすものが出来ている。まぎら、す者が出来ている。

ここで、人の心を動かす、まぎらすものとして「親とか子とか兄弟とか、朋友とか社会」等の「人情」が言われる

なか、身寄りのない今蔵自身が言う「どうも孤独の感に堪えない。要するに自分は孤独である。」とは、先述したように存在の支えとなっていた「深い人情」を失ったことを自覚した言葉であろうし、そうした人生を

儂いものに違いない。理屈は抜きにして真実のところは儂いものらしい。

と言うのである。それは、自我や生きる気力といったものを奪われていく自らの、どうすることもできない運命的な人生を痛感している言葉だと言えるだろう。こうした今蔵の当時に振り返ることを躊躇する思いの背後にある、自らの運命的な人生に対する恐れが、この島に身を埋めようとする今蔵の覚悟への最後の障壁となっていると考えられるのである。

しかしこの振り返ることを躊躇せざるを得ない思いと表裏一体にある、弱い自己に対する自嘲的な批判は、事件の核心部分の一カ月間を書き留めていく段になって即ち、母の公金の横領と妻子の心中事件という、起きてしまった事実を反芻することに見合うようにして、影をひそめていく。代わって今蔵に出てくるのが《運命》という言葉なのである。

・ 忘れる。このできない十月二十五日は過ぎた。(中略) 総て自分のような男は皆な同じ行き方をするので、運命といえは運命。(五月十六日)

・ 心に爛れたところが有るから何でもないことで妻に角立った言葉を使うことがある。(中略) 然し運命は永くこの不幸な男を弄そはらず、十一月二十五日の夜を以って大切と為てくれた(五月十七日)

・ 何故そんなら革包を拾って帰った時に相談しなかった。と問うを止めよ。大河今蔵の筆法は万事これなのである。(五月十九日)

これらの三回運命が言われる箇所に見えるように、今蔵は、自らの弱さのために母の横領を止められず、またその

気の弱さ故に心の爛れた対応によつて妻子を心中させてしまうという、自らが支えとしてきた深い人情を失う取り返しのかなくなつた事実を更に強く認識することで、自覚されていた自らのままにならない人生における運命をかみしめていかざるを得なくなつていったのだと考えられるのである。日記後半は、島での暮らしに身を埋める覚悟への障壁、怖れとなつていたこの運命に対して、それを受容せざるを得ない自らの運命として対峙することに執筆の意図が移つていると言えるが、それが窺えるのが結果的には最終日の記述となる五月十九日の記事内容である。

別してお政なんぞ、(中略)母もそうだ、自分を生んだから自分の母だ(中略)そこで親子の情があれば真実の親子であるが、無ければ他人だ。初から他人なのだ。(中略)明日は日曜。同勢四五人舟で押出す約束であるが、お露も連れこみたいものだ。

というように、ここでは今蔵が、それまで不如意の人生における運命が痛感されているときには、その不安を乗り越えられなかつた人情喪失へのこだわりを、何とか振り捨てようとして島での暮らしに目をやろうとしているが、そこに受容せざるを得なくなつた自らのどうすることもできない運命を、今まさに受容せんとし、ままにならない人生にその一步を踏み出さんとする今蔵の姿が写し出されていると見ることができるのである。

註(1) 関 肇 前掲論文 一三三頁

四 日記を読んだ記者の視点

〈酒中日記〉の書き手であった大河今蔵の死が、「大河今蔵の日記は以上にて終りぬ。彼は翌日誤つて舟より落ち遂に水死せるなり。酔いに任せ起つて踊りいたるに突然水の面を見入りつ、お政お政と連呼してそのまま転落せるなり

という。」というように、日記を読んで公開した記者の付記によって報告される。この点に関して芦谷信和氏は、

お政の幻影が突然現われて大河を水死させるのは「人の力を以て過去の事実を消すことの出来ない限り、人は到底運命の力より脱る、ことは出来ない。」という独歩の運命観を示している。(1)

と指摘されているが、この独歩の運命観が示されているとするお政の幻影が現われたことによる今蔵の死を、本稿において、作品における記者の付記の視点が報告するという観点から読みたい。記者の付記は次のような視点と共に、この今蔵の死を報告しているのである。

記者思うに不幸なる大河の日記に依りて大河の総を知ること能わず、何となれば日記は則ち大河自身が書き、しかしてその日記には彼が馬島に於ける生活を多く誌さざればなり。

記者は彼を指して不幸なる男よというのみ、その他を言うに忍びず、彼もまた自己を憐れみて、ややもすれば曰く、ああ不幸なる男よと。(中略)題して酒中日記という既に悲惨なり、この日記を読むに当て特に記憶すべきは実に又この事実なり。

ここでは、日記外の事実と日記内の視点を明確に切り分けること、その上で、日記内の視点を書き手の意図に沿って読み取るなかで見えてくる、この日記の執筆者である今蔵の不幸と悲惨が言われていると考えられるが、その視点によって、お政の名を叫びながら舟から落ち水死した今蔵の死即ち、連続する過去のなかでの最も不条理な天地生存の事実である今蔵の死が明らかにされることで、今蔵が「儂さ」をかみしめた自らの運命的な人生を受容せんとした、その最後の覚悟をはるかに凌ぐ運命の暗い不可思議な力が言われてくることになるのであり、この付記の視点では、今蔵の運命受容をめぐる行方よりも、その自らの意志を凌ぐ運命に向き合ってきた、今蔵の一つの限界が問われていると言いうことができるのである。

ただし、一方でこの記者の付記の視点が、今蔵の日記をへ切り分けようとする評価に明らかかなように、日記外の

事実を見ている点は注目される。

お政は児を負うて彼に先ち、お露は彼に残されて児を負う。何れか不幸、何か悲惨。

とあるが、この点に関して関肇氏は、

記者は、大河の日記の「不幸」「悲惨」を強調することを通して、読者が彼に注ぐのと等しいまなざしを、お政とお露に差し向けることを要請している。⁽²⁾

と述べている。即ち、この要請に従って読むならば、記者の視点においては今蔵の人生にかかわった二人の女性の運命が対置されることで、その自らの運命に向き合ってきた今蔵の《限界》が、客観的に把握されていると言える。しかし、そのなかで日記内視点への注視が言われているように、あえて日記を書く限界の中の今蔵が取り上げられているのである。即ちこの点にこそ、この記者の付記を付けた作者の意図があり、独歩の今蔵の人生に対する限りなき同情があるのだと考えられよう。確かに記者がお政とお露の運命を対置させて見ているように、全体として見れば自分の気の弱さ故に陥った今蔵の人生は自業自得で評価されるべきものではないのかもしれないが、一方でその記者が日記を書く今蔵の視点への注視を言うように、先行研究では否定的に捉えられてきた「何ほ何でも大河は弱すぎる」⁽³⁾と言われるぐらいに自分の弱さの影を見つめ、どうすることもできない運命を反芻している今蔵とその彼の限界に独歩は眼を注いでいる。そこに、自らもまた、一章で確認したように、破婚体験以後の明治三十年代における天地生存の事実の体験のなかで、つねに主体喪失、自我喪失の難局に直面する運命に向き合いながら、人生の裏街道を歩いてきた独歩の限りのない深い共感があるのだと考えられるだろう。それ故、独歩は記者の付記のなかに次のような場面を用意しているのである。

馬島に哀れなる少女あり大河の死後四月にして児を生む、これ大河が片身、少女はお露なりとぞ。(中略)

お露は児のために生き、児は島人の何人にも抱かれ、大河はその望むところを達して島の奥、森蔭暗き墓場に眠るを得たり。

ここで描かれている今蔵亡きあとにお露が生んだ子は、今蔵が、島に身を埋める覚悟をして運命を受容せんと苦闘した証と言うことができようが、その子供が島の何人からも抱かれている様子を描きだすことよって、今蔵が自らの弱さを見つめ問うた生涯は決して無意味でなかったことを示し、それと呼応させるかのようにして今蔵自身については、生前の覚悟としての望みがなかった安息の場としての「森蔭暗き墓場」を写し出すことよって、〈死〉をもつて今蔵が生前には逃れられなかった運命から癒されていく姿を、こうした死と生を超越した救済もあるのだと万感の涙を注いで描いているのだと考えられるのである。その意味においてここに、この『酒中日記』は、若くより「小民」や「宇宙」、「驚異」といった言葉で言い表わされる超越的な世界を見据えてこの世に踏み迷う人間の真の救済とは何かを問うてきた独歩が、それに応えたとと言える人間の運命的な限界と死を通じた彼方の世界の表出を、そうした人間をいやすものとしてこの世の人間連帯の世界の可能性とともに描いて、独歩文学の成熟と深まりを示す作品となっており、たしかに中期の傑作だと見做し得るポイントがあると考えるのである。

- 註(1) 荻谷信和『近代文学注釈叢書 国木田独歩』一七九頁(平成三年四月 有精堂)
(2) 関肇 前掲論文 一五六頁
(3) 中島健蔵『武蔵野』解説(春陽堂文庫)

※本文の引用は、『定本国木田独歩全集』第三卷(学習研究社 平成七年七月)に拠った。旧字は適宜新字に改めた。

※本稿は、近代文学会関西支部春季大会（平成十五年六月十四日 於同志社大学）での口頭発表をもとに作成したものである。
当日会場にてご教示下さいました諸先生方に感謝申し上げます。

（やとう なおや・関西学院大学大学院文学研究科研究員）